



進修同窓会 HP にアクセス

第190号 2025 (令和7) 年6月17日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



中11回生『進修第16号』1913〔大正2〕年2月20日発行)

土浦中学校の修学旅行 3 中11・12回生日光旅行

明治40年代に入ると、土浦中学校の修学旅行は、年度により多少の違いはありますが、1年県北、2年東京、3年鎌倉・横須賀、4年日光、5年箱根が、それぞれのコースとなりました。
今号では、1910〔明治43〕年の日光旅行を『進修第14号』(1911年3月発刊)「第三・四学年両毛地方旅行記」で述べていきます。
引用文中の旧字体は新字体に改めました。
なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

華厳滝

この年は、3年生(中12回・4年生(中11回)合同で「前橋共進会」の見学も兼ねて日光へ向かいました。

10月18日、3年生は西尾頼三(国語)、北吟吉(英語)先生、4年生は大峽秀栄(英語)、清水増太郎(国語)先生引率の下、一行130余名が土浦駅8時12分発の常磐線下り列車で出発。友部駅で県北へ向かう1年生と別れ、水戸線に乗り換え、小山からは東北本線の日光行き列車に乗り込みます。宇都宮から日光線に入り、鹿沼からは例幣使街道の杉並木を眺めつつ、午後2時に日光駅に到着。荷物を今宵の宿・神山旅館に預けると、生徒たちは思い思いに、神橋や霧降滝の見学に出掛けて行きました。

19日、東照宮、大猷廟を拝した後、一行は草鞋踏みしめ、電車道^(注1)に沿って、華厳滝を目指します。馬返からの羊腸の小径は九十九折りとなり、彼方の断崖絶壁は何れも錦衣を纏い、眼が眩むばかりです。校歌作詞者の堀越晋(中11回)は、この華厳滝の景観を「第三・四学年両毛地方旅行記」(以下「旅行記」といいます。)に次のように記しています。

「華厳瀑 四年 堀越晋

晃山「日光」一季から成っているので、日光山の楓葉風に翻り、溪声滔々の響きと共に予等一行を歓迎し、足の労れは少しも感ぜず、方等般若の二瀑を右に見て、険なる旧道を攀ち太平に到る。

此所より、葛折り「九十九折り」なる坂道を下れば、遠雷の如き響、耳朶「じだみ」を打ち、耳を撲ちぬ、途中両崖の迫る所にかゝれるバウンドする橋を渡る際、白雲滝あり、大巨巖の中部より、白雲の溪谷より湧き出づる如く噴出し、飛沫面をうち一佳境たるを失はず。突き出でたる巖下を潜れば忽ち見る、一大銀河中空より懸れるを、これぞ名にし負ふ華厳の滝なり。奇巖峻壁を破つて瀧々「びようびよう」水が流れるさま」として直瀉するや数

十尋【尋 ひろ 長さの単位。約4尺5寸(約1.36m)ないし6尺(約1.8m)】、千万の銀竜飛跳して深潭【しんたん 深い淵】に舞ふ、巖怒り、水吼え、白雲飛び、六花飄り、余沫散じて、霧となり、烟となり、その響万鼓斉しく発し、百雷一時に落つるが如し、為に山動き、谷震ひ、四壁尽く鳴動し、附近の小亭の盤水【はんすい 皿・鉢・盥などに入れた水】常に波紋を生ずと云ふ。

五郎平茶屋なる小亭に上衣を脱ぎ捨て、滝壺近くに寄れば、風急にして雲氣面を圧し、飛沫衣を潤し、寒気を覚ゆ。此処に於て、予は雄偉壯快なる此の大観に接し、眼眩み魂飛び、自ら潭辺に佇めるを忘れ、永遠の浜に徜徉【しょうようさまよう】せるが如き感あり。

かくて名残を瀑底に止め、径路を攀ぢ、台上の小亭に憩ひて中禅寺に向ふ。「日光東照宮に人工の美を賞し、華厳滝に自然の偉を讃した一行は、遂に中禅寺湖畔に到着。3年生は葛屋に、4年生は米屋に旅装を解き、旅館裏の汀で釣りを楽しんだり、各々くつろいだ時間を過ごしました。」

(注1)電車道

日光電気軌道線の軌道が敷かれた道。日光電気精銅所(日光市清滝)の貨物輸送に加え、日光東照宮などの観光客の足としての役割をも担った同線は、1910年、日光停車場前々ノ鼻間が開通。¹⁹¹³「大正2」年に馬返まで全線開通。山道を行く、珍しい路面電車で、標高838mの馬返は、日本国内の路面電車では最高地点であった。第一、第二いろは坂の開通により¹⁹⁶⁸「昭和43」年に廃止された。東武鉄道東向島駅にある東武博物館に車両が保存・展示されている。

中禅寺湖を渡る

20日、午前7時出立。二荒山神社中宮祠を拝した後、十数隻の小舟に分乗して、中宮祠の浜から中禅寺湖へ乗り出しました。舟は雁行して櫓の音勇ましく、湖面を滑って行きます。この舟からの光景を3年大村豊は「旅行記」に、「中禅寺湖」

と題して、次のように「中禅寺湖」と題して、次のように述べています。

「……湖を環する諸峰、遠きは頂を露して遙かに蒼穹を摩し、近きは影を浸して山上細波を印す。秋空一拭、湖面如鏡。見よ。四周の山を彩る木といふ木、すべて落葉ならざるなく、葉といふ葉悉く色附かざるなし。舟人語つて曰へらく、今歳雨徒らに多くして楓葉霜に飽かず、観の美例年に劣ること数等と。遮莫【さもあらばあれ】、彼の旭日に映じて爛然【らんぜん 燦然】燃えんと欲するの状、ここを措いて【おいて】を除いて【も】何も何地【いずこ】何処【どこ】にか覺め【も】とめ【とめ】ん。前舟後舟驢【ろ】呼痛吟の声を絶たず。我恍然、骨亦仙ならんとす^(注2)。あゝ、此の境此の情、我終生忘るゝ能はざるべきなり。」

紅葉の美に打たれ、湖を渡ること一時間、阿世湯に着岸。阿世湯から山道を登り、阿世湯峠を越えて十数km、足尾に近づくとつれて、山には枯れ木が目立ちはじめました。更に歩を進めると、山の狭間から真つ黒な煙がたなびき、一種異様な臭気も襲ってきます。付近の山々には一木一草すら生えていません。午後1時、足尾町に到着。宿で一休みし、全員が揃ったところで、足尾銅山を見学。午後4時、宿に戻り、入浴、夕食。午後9時30分就寝、昼の疲れに、皆白河夜船、前後不覚に眠りこけてしまいました。

(注2)骨亦仙ならんとす

仙骨(仙人のような骨相)から「仙人になりそう」だの意。

雨中旅行 大間々に向かう

21日、足尾から大間々まで、渡良瀬川に沿って約50kmは、雨中の行軍となりました。4年生村松精治(中11回)は、「旅行記」に、この強行軍を次のように書いています。

「雨中旅行 四年 村松精治

実にも世は塞翁の馬なる哉。喜極つて悲生じ、悲満ちて復喜来る、楽あれば苦来る。世の常の例にもれず、神と人とが巧を競ふ日光に中禅寺に極楽仙郷の楽を極め耳目を慰めし三日の旅は夢幻の如く去りて、今や聞くも恐しき【足尾鉾山】鉾毒事件に、席旗【蓑旗 むしろばた】翻り竹槍閃きし渡良瀬川に沿うて十二里の長途を進まんとするなり。夜来の细雨雲々【しょうしょう 雨の音】として止まず、冷気膚に迫りて粟を生ず^(注3)。

午前三時、天闇うして街灯の光寂しき足尾町を出発す。
実に此日の旅行たるや、最初より頗る惨憺を極めたり。微かに聞ゆる鶏鳴と呪ふが如き渡良瀬川の急流が巖に激する響の外は、前後四つの列中、闐【げき 静か】として声なし。四面暗黒の裡、外套を被れる各人は誰某【だれそれ】なるか弁ぜずと雖も、衆人の顔容蒼然として固く口を閉ぢたるや疑無し。雨に洗ひ出されたる小石多くして、動【やど】もすれば足を傷けんとし歩行頗る艱む【くるしむ】。闇中巨眼を睜り【みはり】て行く事二里余。天漸く白く道明かとなりたれども、雨は少しも勢を減ぜず、外套は恰も水を含める海綿の如く、重量頗る【とみに】増し、動作苦しきこと限りなし。されど苦を言ふ者絶えて無く、暗に潜みて鬱勃たりし元氣は、漸く発し来りて互に相励まし、勇往邁進す。途中屢止りて疲を休むれども四辺の風物、何等の見るべきものなく、平々凡々、人をして倦怠を加へしむるのみ。九折坂なる道路、雨を帯べる櫛【ハゼ】葉、色渥丹【渥丹 艶のある朱色】の誤植かの如き楓葉、河中奔湍【ほんたん 早瀬 急流】の景致、可ならざるに非ず、悠々鑑賞の遑【いとま】なきを如何せん。
雨中山水の佳景を賞するも、座して之を見るか、悠々緩歩の際の事なるべし。強行軍を覚悟せる吾人、豈【あに】風流騷人【そうじん 文人又は詩文を作る人】を学ぶべけんや。道路愈々粗悪、泥濘膝を

没すとや言はん、前に進む友人のみすばらしき様を見ては、予も亦斯くあらんかと怪しむのみ、雨は尚ほ止まず、外套は正に甲冑の重みあり、然れども関東男児一難を加ふる毎に勇氣百倍し、或は詩を高吟し、軍歌を合唱し、時にハーモニカの嚙唳たる美音を交へ、歩調は一步は一步より速に、猛然として突進す。空腹を感じれば此所其所【こそこ】の茶店に果物など買ひ、店守る老翁が不意の利得に思はず洩らす恵比寿顔を残し、五六の宿駅いつしか打ち過ぎ、花輪の里にて午餐を喫す。

情けある茶居の焚火にしばし暖を取り、休憩する事一時ばかり、更に勇を鼓して壮烈極まる大突進を続行し、長き大間々町を経て【大間々 停車場】現尚毛驢宿【に】着きしは正に午後三時、十二里の長程踏破し尽し、此に到りて雨全く止む。顧れば日光足尾の連山、濛々たる薄霧の中に遠く頭を現して、吾人強行軍の成功を祝するが如し。予本日草鞋を更ふる【かふる】事実には六足、以て其悪路行軍の猛烈を想ふべし、而も百三十人の同胞一人の落伍者無きに至つては、実に痛快を叫ばざるを得ざるなり。誰か我校の同胞を元氣無しと言はん、吾が此の強行軍を見よ吾が此の強行軍を見よ、この強行軍こそ真に吾が同胞の剛勇を証する実例に非ずして何ぞ。」

4年生村松は、土中生の健脚、剛健ぶりを記していますが、3年生はそうはいかなかったようで、3年生菊池民雄は「旅行記」の中で「大間々に向ふ」と題して、行軍の苦しさを伝えています。

出発当初は、

「……、橋がある。ここを渡るときは愉快だったドッカドッカカタカタ百三十余人が、足音高く杖を突立て、調子を揃へて踏み轟かした。……。」
と、元気に溢れていましたが、渡良瀬川に臨んだ山裾の路を、流れに従つて辿っていくうちに、

「……、もう足並は四度路【しどろ】になつた。

澤入【そうり】といふのは山間の小駅だ。草鞋を穿き換へたものも随分ある。外套が重くなつて来た。列は乱れかかつた。……。」

と、遅れる者も出てきました。

それでもまだ、

「……、路は頗る変化に富んでる。これが僕等に対する唯一の慰藉だ。……。」と、周囲の景色を眺める余裕も見せていました。が、昼近くになると雨にも濡れそぼつて、

「……、石に激して珠を散らしながら流れた渡良瀬の急瀬が稍下に下つて、やがて小舟を浮べて静かにゆつくりと歩いて行く頃には、僕等の足も覚えずゆつくりとなり勝ちであつた。雨は一寸の小止みをも見せぬ。外套を透して服を透して襯衣【しんい 下着】から肌まで濡れた。隊列が長く伸びた。間が疎ら【まばら】になつた。列は崩れたのだ。

花輪といふ駅で小憩して弁当を食つた。秋の雨は冷やかだ。況して【まして】骨まで濡れた僕等は、脚が凍るかと思つた。いかに力んで見ても胴顫【震い】を禁め【とめ】られぬ。北先生の奔走で焚火にあたることを得たが、程無く歩を起さねばならぬ時が来た。遙かに後れた落伍者は、殿【しんがり】の衛生係りが収容しつゝ来ることになつて居るので、此処に在る人員だけを点検して、再び隊を整へて歩き出した。一三人、ガタ馬車【粗末な乗合馬車】に身を托した友もあつた様だ。

少し行くと、もう隊列は崩れてしまつた。誰の足も余程重たげに見える。

とぼとぼと雨の中を進む。……。」

菊池たちは、大間々停車場を目指して、重い足を引きずるのがやつとで、友と語るのさえ物憂くなりました。それでも、大間々の町が近づき、喜んだのもつかの間、

「……。大間々の町の長いには驚いた。町から停車場までの遠いのにには寧ろ腹が立つた。ヘトヘトになつて、停車場前の茶店に腰を下したときは實際涙の出るほど嬉しかった。が、生れて始めて【初めて】の草鞋旅行に、雨を冒して十三里の泥濘の路を踏破し了へたといふ小さな誇りを感じました。

暫く待つてゐる中に殿りの隊も著【着】いた。一人残らず到着した。前橋に向ふべく【岡毛線の】汽車に乗つた。」

菊池は行軍の辛さを書いています。が、ともあれ、日光から大間々までの山道60数kmを、一人の落伍者も出さず、歩き通したことは、村松が言うように「実に痛快」であり、「土中生の剛勇」は十二分に証せられたと思います。

^(注3) 膚に迫りて粟を生ず
「粟膚」寒さなどのために、肌にあわつぷのようなものがでること。鳥肌。

前橋共進会

24日夜と25日朝には前橋共進会を見学。「共進会」とは、産業の振興を図るため、参加府県が物産を陳列し、その成績を審査表彰するもので、「内国勸業博覧会」とともに明治10年代から、殖産興業政策の一環として、全国各地で開催されてきました。前橋共進会は、群馬県主催の「二府十四県連合共進会」で、1910年9月から2ヶ月間に亘つて開催されました。会場は、第1会場の本館、第2会場の参考館、第3会場の馬匹畜産共進会、と3ヶ所設けられ、本館にはイルミネーションが設置されるなど、大変な賑わいを見せ、入場者は13万人に上つたとの記録があります。
土中生たちも共進会を見学したはずですが、『進修第14号』『旅行記』には、共進会の記事は、なぜか一行も書かれていません。